

あれは竜宮城？それとも鬼ヶ島？

＜私のニューヨーク物語⑦＞

ニューヨーク補習授業校は、世界の在外教育施設の中でもかなり特異な存在で、学校運営の舵取りがとても難しい学校であるとの根拠の一つを、「教育の質」の観点から、第85号で述べました。本号では、「保護者の負担感」の観点からです。

繰り返しますが、ニューヨーク補習授業校は土曜日だけの学校で、土曜日だけ現地校の校舎を借用します。また、担任以外の先生がいません。

よって、学校運営において、保護者・PTA（ニューヨーク補習授業校では「父母会」という組織）の協力は不可欠です。

まず、銃社会のアメリカですので、学校のセキュリティのために校内を定期的に巡視する保護者当番があります。子どもたちが休み時間に、クラス単位で日本語の図書をカフェテリア（ランチルーム）に借りに来るので、その貸し出しの当番があります（蔵書は、たくさんのカートに載せて用意されており、借用校の倉庫の一室を借用して授業日に持ち出す）。幼児部の活動のサポート、初等部の運動会や6年生を送る会、中等部の球技大会など、保護者の多大なマンパワーが必要となります。特に運動会は補習授業校最大のイベントなので、保護者の仕事が細分化されて割り当てられます。その他、節分の豆まき、七夕、クリスマス会、習字教室、その他、担任の先生にお願いされたボランティアでの協力に対して、学級代表者（クラスマザー）には、クラスへの連絡やボランティア人員のとりまとめなどの仕事がかかります。その他、父母会が独自で取り組む、放課後クラブの活動などもあります。

ですから、子どもを学校に送ってきて、そのまま学校にずっと居続ける保護者も少なからず出てくるのです。

こういった仕事や割当、それに伴う人間関係を煩わしく思う保護者も、特に駐在組にはそれなりにいて、補習授業校に通わせる費用対効果を考えて、年度途中や年度替わりに辞めていく家庭も存在していました。

当時、私がやるべきことは、先生方の授業力を含めた「教育の質」を上げること、そして、こういった「保護者の負担感」を少しでも和らげることに努めることでした。

父母会の役員と様々な協議を重ね、負担軽減のためのシステムの見直しや創意工夫を図っていきました。ただ、学校の性質上、最低限の保護者の協力が不可欠なのは当然であって、そのための理解と協力は、在校生保護者にも、新規に転入・入学を検討している家庭にも丁寧に説明しました。それは、PTA活動の存在義が声高に叫ばれている日本の学校でも不変の論理です。

「お父さんお母さんが、自分のために汗を流して働いている姿を子どもが目にするのは、何にも勝る教育である」と。

さて、本号まで7号にわたって、在外教育施設であるニューヨーク補習授業校での経験を踏まえた内容について書かせていただきました。

赴任前に、日本の知人・友人からは、皮肉を込めてこんなことを言われたもんです。

「いいなあ、一日しかない学校なんて。」「部活動がなくて楽だね。」「4年間遊びに行ってくるようなもんだな。」

とんでもない。ここまで述べてきたように、仕事上のストレス、プレッシャーは、日本の学校と比べられないほど大きいものでした。自分の責任ではないことがほとんどなのに、自分と関わるあらゆる人間の不平・不満・愚痴・クレームの類は、すべて自分自身に向けられてきたからです。ですから、良かれと思ってとった言動で恨みを買ったり、自分の味方だと信じていた人間が実はそうではなかったり、嫌な思いもたくさんしてきましたし、人間の醜い部分も嫌というほど見てきました。授業日前日の金曜日の夜は、ほとんど寝付けませんでした。

しかし、様々な人とのすべての出会いは、かけがえのないものでした。

現地組であれ駐在組であれ、あるいは補習授業校の日本国籍以外の保護者であれ、皆さんそれぞれ類まれなキャリアや肩書をもった、いろんな意味ですごい人ばかりで、一言で只者じゃない人が多かったのは確かです。個性的で魅力的で、率直に言えばアクが強くて押しが強くて一筋縄ではいかない、交渉相手として見るならばタフな存在で、大いに苦勞したのも事実です。ただ、そういった方々と丁々発止で向き合ったことは、とてもいい勉強になりました。

また、日本人のコミュニティは狭く、公私の境が曖昧な状況であったのも事実です。ただ、それは海外在留の身としては当然のことで、勤務する補習授業校の保護者等の関係者や、子どもの学校繋がりで親しくなった方々がたくさんできて、今でも家族ぐるみで濃密なお付き合いをさせていただいてる方もいます。また、松井選手の他にも、日本では容易に会えない有名人の方々と顔を合わせる機会がもてたことも貴重な経験でした。

現地のアメリカ人とのつきあいで、上から目線で差別や偏見の対象と感じて嫌な思いをすることも往々にありましたが、それもまた一つの人生経験だと受け止めています。

そして何よりも、日本国内以外にも、がんばっている日本人の子、日本人をルーツとする子、そしてその保護者を含めた日本人がたくさんいるということを知りました。

特に補習授業校の子は、平日は現地校で土曜日は補習授業校での週6日学校に通います。現地校だけでなく、補習授業校では一週間分の宿題・課題が出され、日本の子の何倍もの努力を重ねていました。それ以外にも、地域のスポーツや芸術のクラブ活動にも熱心に取り組むなど日々全力疾走でした。そしてそれ以上に、保護者のサポートやバックアップも常に本気モードでがむしゃらだったのです。

当時私が関わっていた子どもたちは、今では20歳代半ばから30歳代半ばですが、多くの卒業生が、現在は世界各地や各方面で活躍している噂を見聞きするにつけ、大いなる誇りと喜びを感じます。因みに、私が赴任していた当時の在校生には、現在モデルでタレントの河北麻友子、OGには宇多田ヒカルなどがいます。

自分の仕事の都合でニューヨークまで連れてきた家族にも、心から感謝しています。迷惑をたくさんかけましたが、何より幸せだったことは、朝食も夕食もいつも4人で共にできたことです。仕事仕事、部活部活で家庭を顧みなかった罪滅ぼしを、まとめてようやくできた気分でした。

文部科学省の規定で、日本への一時帰国は認められない時代でした。4年ぶりに帰国した日本の教育現場に戻ると、もはや浦島太郎状態で、リハビリに相当時間がかかりました。

今では、20年も前に、かのニューヨークの地で自分が働いていたことなど信じられません。果たしてあの日あの時に息づいていた場所は、竜宮城だったのでしょうか、それとも、鬼ヶ島だったのでしょうか。そんな幻想的な迷宮で得た知見や経験を、その後の日本での教育に十分に還元できてきたとしたら、おとぎ話としては上出来だと感じています。

(第82～88号内のデータ等は当時のもので、記憶が不確かな部分もありますのでご理解ご容赦ください。)